

さらしなや、寒さらしなの名にしおふ、おばすてならぬ、そばきりを、しばらく見ねば、わが心、なぐさめかねつ、きのふしも、寺へまうづる、日なれども、ひるのあつさに、たへかねて、夕さりつがた、いでゆきて、寺にいたれば腹もはや、むなしくなりて、かへさには、人しげからぬ、茶づけやへ、たちもよらんと、おもへども、天王すゞみ、金毘羅の、腕のほりもの、まろはだか、るならびをれば、おそろしみ、たちもよられず、衣手の、ひだるき腹をか、へつゝ、かへりて見れば、おもほえず、おやつこさまの、ぢい君より、寒さらしなをぞ、たまはると、きくにこゝろもうきたちて、やがててうじて、五六はいたゞ夢のごとかきこみて、くへばくふほど、そのあちの世にたぐひなく、おほえつゝや、人こち、つきてのち、御せうそこをひらき見て、かのまがいほの、目鼻をとのたまふことの、ねもごろき、それかゝんこと、そばきりを、かきこむよりも、いとやすし、御廬の名の、まがいほの、まがりなりにも、そばきりの、ぎりく書て、たてまつるべし、

〔百家琦行傳五〕桔梗屋於園

安永の頃、東海道藤澤宿に桔梗屋といへる邸家あり、爰に園といへる婢女ありけり、同國一の宮といへる處の農夫の子也、生質蕎麥切をこのみて食する事おびたゞし、徒然草に見えたる、丹波の栗くひ娘の如くなり、米の飯麥飯などは嫌ひて食す、唯蕎麥をもつて常の食とす、且蕎麥切を制る事、上手にして奇妙なり、かゝる異物なれば、縁うすくて夫なし、十八歳の春より風と此桔梗屋へ給事に來りけるが、爰に相模の國大山の石尊とて、大己貴の命を祭りたる山あり、六月の始より七月の末までは、參詣の人おびたゞしく、殊に江戸人おほく登山しけるにぞ、道中の邸家も大いに繁昌して賑しかりける、いつしか這園が蕎麥を上手に制する事名高くなりて、江戸人おほく這家にやどり、園に蕎麥を制させて、喰ける事流行けり、園また蕎麥をしひす、むる事上手にて、客人一椀くひ終るとき、園はるか這方よりまた一椀の蕎麥を投こみける、其蕎麥切あやまた